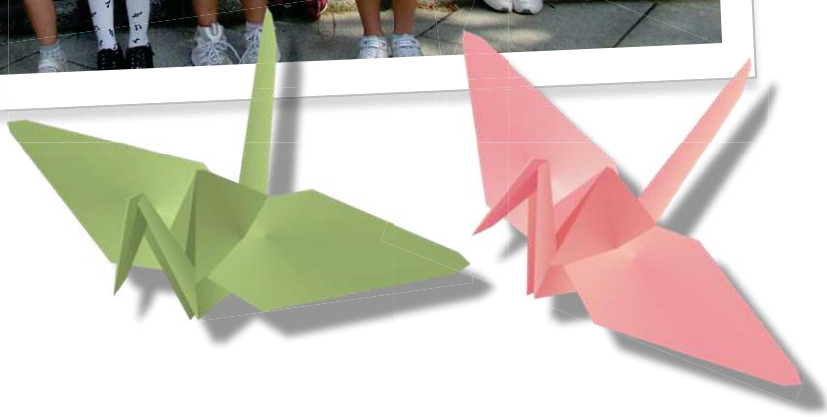


平成 25 年度流山市平和大使広島派遣事業

「平和大使として広島へ行って」



作文集



この作文集を手にとって取っていただいたあなたへ

私たちは、「流山市平和大使」に選ばれた小学五・六年生十五人です。

私たち平和大使は、八月五日、六日に平和の尊さを学ぶために、広島に行きました。

五日には、原爆で被爆された方の貴重なお話を直接聴きました。そのお話の内容は、私たちが想像していた以上のもので、原爆の恐ろしさを改めて知り、そして現在でも多くの人々が辛く悲しい思いをしているということも知りました。

その後、広島平和記念公園に行き、皆様から寄せられた平和への思いが込められた千羽鶴を「原爆の子の像」の折り鶴台へ献納しました。また、公園内にある広島平和記念資料館では、原爆投下の悲惨さを物語るものが展示されていました。

六日には、平和記念式典に参列し、広島に原爆が投下された八時十五分に黙とうを行い、原爆で犠牲になった方々のご冥福を祈りました。その後、原爆ドームや袋田小学校平和資料館を見学しました。

これらの平和大使としての体験を通して、私たちが学び感じたことを多くの人に知っていただきたいという思いから、この作文集を作りました。私たち平和大使の役目は、平和への想いを未来に伝え、つなげていくことです。

この作文集を読んで感じたこと、考えたことを周りの誰かに伝えて、私たちと一緒に平和のバトンをつないでいきましょう。

平成二十五年 流山市平和大使

◆目次◆

• 作文「平和大使として広島へ行って」1～16ページ

「68年前の広島を知って」	二瓶 康太郎（流山北小学校 6年）	1ページ
「広島へ行って学んだこと」	太田 駿（鱈ヶ崎小学校 5年）	2ページ
「平和であり続けるために」	西村 奏（小山小学校 5年）	3ページ
「原ばくのおそろしさ」	出口 未蘭（西初石小学校 5年）	4ページ
「広島に行きって学んだこと」	島田 智章（小山小学校 5年）	5ページ
「広島に行きって考えたこと」	吉田 健吾（鱈ヶ崎小学校 6年）	6ページ
「広島で学んだ平和」	井上 紗奈（東小学校 6年）	7ページ
「戦争のおそろしさ」	海士 夕來（流山北小学校 6年）	9ページ
「広島原爆」	税本 佑太郎（八木北小学校 5年）	10ページ
「まだ任務は終わっていない」	大江 華暖（小山小学校 5年）	11ページ
「原ばくのおそろしさを知って」	加藤 美々稀（江戸川台小学校 6年）	12ページ
「昔と今の広島」	佐藤 秀哉（江戸川台小学校 6年）	13ページ
「平和な世界を作るために」	嶋田 あみ（江戸川台小学校 5年）	14ページ
「八月六日、わたしは広島にいた」	曾我 美月（長崎小学校 5年）	15ページ
「原爆で家族が突然消える」	渡辺 柊咲（流山北小学校 5年）	16ページ

• 写真集

17～21ページ

• 流山市の平和に関する取り組み

22ページ

「平和大使として広島へ行って」

題「68年前の広島を知って」



流山北 小学校 6年 氏名二瓶 康太郎

た。た一つの原爆で、広島は一瞬間で火の海になりました。広島は、建物爆風で吹き飛ばされ、鉄線がドロドロになり、目飛び出してしまった人を、全身にヤケドを負った人、ケロイドになった人、性別がわからなくなっている人がいました。その人達が持っているたもの、着ていた服などは、ボロボロになったり、黒く焼けこげてしましました。

原爆が爆発して10秒の間に7万人の人が亡くなりました。それらを見たり聞いたりした帰り、みんなという時は、心の重さを分けている感じがした。でも、家に帰ると心の重さを一人で背負いこんでいるような気持ちになりました。

当時、ゲガ人は、広島市の東にあつた、東練兵場という所に入れられて、手当てなどをされたそうです。

そこで亡くなられた人は、深い穴の中に入

れられるが、トラップでどこか遠くにつれていかれました。おそろく、燃やされたのでしよう。

ところが、それだけではありませんでした。まだ、生きている人までトラップで遠くにつれて行かれたのです。

これを聞いた時、ぼくは、「生きている人まで亡くなった人と同じあつかいをするのか」と思いました。

原爆の被爆者は、68年たった今でも、苦しんでいます。

「原爆は非人道兵器の極みであり、絶対悪です」と、広島市長は言いました。

ぼくも、その通りだと思います。

戦争は、決して、今の日本と、無関係なわけではないのです。世界唯一の被爆国の国民として、決して戦争や核兵器の惨状から目をそむけてはいけません。

ぼくは、広島と、原爆について考え、周りの人にも、伝えていきたいと思っています。

「平和大使として広島へ行って」

題「広島へ行って学んだこと」

鯖ヶ崎

小学校 5年

氏名 太田 駿



ピカッ!! ドーン!!
 たった一つの原子爆弾が広島を消した。
 千九百四十五年八月六日午前八時十五分、原
 子爆弾が広島の上空約六百メートルで爆発し
 た。爆発で、熱線、放射線、爆風などが人々
 をおそった。熱線で焼けどやケロイドになる
 人、爆風で木やガラスが飛んできてけがをし
 た人など、負傷者は七万人に達した。被爆
 者は白血病、ガン、脱毛などの症状が現れた
 もし、自分が被爆して、脱毛の症状が出た
 ら、こわくて人前に出られないと思う。
 実際に被爆したおかたさんに話を聞かせて
 てもらった。
 「きれいに輝いている飛行機が飛んできて、
 きれいだなあ」と見ていたり、急に光がさくれ
 つしました!! そのあとは何が起きたりかわか
 りませんでした!!
 と話していた。
 自分たしたら、まず、家族を探すと思う。
 そして、家族が見つかったら、急いで安全

な場所へひなんすると思う。見つからなかつ
 たことなんか、こわくて想像できない。
 ぼくが思う平和とは、わからないことと色
 々勉強できる楽しい生活だ。これからも、平
 和はずっと続いてほしい。
 原子爆弾が落とされたことを物語る物が平
 和記念資料館に大切に保存されている。
 入館料がとても安いことにびっくりした。
 たくさんの人に原爆のことを知ってほしいか
 らなのだと思う。中には、熱で変形した瓦や
 中身が真黒な弁当箱など色々な物が展示し
 てあった。原子爆弾はすごい威力をもつてい
 るので、もう使ってはならないと思った。
 人の命をうばう物は、あつてはならないと
 思った。被害にあつた人から聞いたことをも
 とたくさんの人達に伝えていきたい。

「平和大使として広島へ行って」

題「平和であり続けるために」



小山小 小学校 5年 氏名西村 奏

私は、広島に行、て、一番心に残ったのは、岡田さんのお話の、原爆が落とされた直後の様子です。資料館でも模型を見てきましたが、皮ふがとけかか、ていたり、うでのほねが見えたりしている人がいたそうです。また、何年かた、ても、放射線を浴びたせいで、計算がでしなな、たり漢字が書けな、たりして、しゃ、うし、よくやけ、こんがでしなな、たり、白血病やケロイドにな、ていたりして、けいべつされたそうです。被爆者は何も悪いことをして、いないのに、原爆の被害にあ、たというだけで、このようにな、てしま、うのは、かわいそう、だ、と思、いました。私は、広島に行く前に、「禎子の千羽鶴」という本を讀、みました。その本に、原爆傷害調査委員会(ABCC)という調査機関が書、いてあり、このABCCとは、原爆が人体に、どんな影響をあた、えたかを調、べるために、アメリカが設置した、そうです。アメリカは、原爆の実験もか、ねて、広島に原爆を落と、した、そう、だし、禎子さんが、また、死んで、

いないのに、ABCCから、死後に遺体を解剖したい、という依頼が、とどいて、いた、そう、なので、当時のアメリカは、ひどい、と思、いました。広島に行く前も、原爆について、知、っていた、けれど、広島に行、て、より、くわ、しい、こと、が、わ、かり、ました、また、テレビなどで、式典を見、たりした、時は、人、ご、と、の、よ、う、に、思、え、た、けれど、岡田さんの話を聞いた時は、被爆者から、直接聞、いた、ので、身、近、に、感、じ、ま、した。同、じ、過、ち、を、く、り、返、さ、な、い、よ、う、戦、争、の、み、さ、ん、を、よ、り、多、く、の、人、に、伝、え、て、い、く、こ、と、が、大、切、だ、と、思、い、ま、した。平和であり、続、ける、た、め、に、私、は、自、分、と、意、見、の、ち、が、う、人、の、話、も、ち、ゃ、ん、と、聞、き、た、い、で、す。

「平和大使として広島へ行って」

題「原ばくのおそろしさ」



西初石 小学校 5年 氏名 土口 未蘭

わたしは、88年前の8月6日に、原子ばくだんが広島に投下された事は、本を読んで知っていただけで、実際に広島へ行き、原ばくドームを見たり、原ばくでひばくした方の話を聞いたり、平和記念資料館を見学し、原ばくのおそろしさがよくわかりました。記念館で見た写真の中の広島は、ほとんどばく風でふき飛ばされて、おどろぎをかくせまじんでした。もしもわたしがその時代に生きていたら、この想像すると、こわくてたまりません。ふだんのわたしの毎日は、ごはんを食べ、勉強して、遊んで、温かいふとんでねる。それが当たり前だと思えていました。けれどそれは、戦争中の子供達にはできなかったことでした。わたしはとても幸せな人だと思いましたが、今でも戦争なんてこわくない、と思っていました。しかし、原ばくが落とされたえい像を見て、それはちがうと思いました。大きな雲がまき上り、そのしずん間に、四〇〇〇度のばく風がまき

起こり、家はこわれ、火事が発生し、放しや能をふくんだ黒い雨がふりました。今も原ばくひばくに苦しむ人がたくさんいます。原ばくは、多くの人をキず付け、命をうばうおそろしい兵器で、この世にいらぬと思いましたが、わたしが最もうたえたい事。それは、戦争のない平和な社会を作りたいかなければならぬという事です。そして、ひばく死した人達がわたし達に伝えたい事。それは、きこいと同じあやまちをくり返しては、いけないという事だと思えます。今回の体験は、わたしにと、とてもきゆうなものでした。次の「平和大使」にバトンをつなげて、次へ次へと、原ばくのおそろしさと平和の大切さが広まっていけばいいと思います。そしてわたしも、みんなに伝えていきます。

「平和大使として広島へ行って」

題「広島に行って学んだこと」



小山小学校 5年 氏名 島田 智章

げくが、去年お兄ちゃんか平和大使にたのぼしたかと
 いうと、去年お兄ちゃんか平和大使になり、
 すばらしい体験をした話を聞いて、ぼくも広
 島に行ってみたいと思っただからです。
 出発の前に、千羽づる作りのポランティア
 をしました。つるが十九万羽もあってびっく
 りしました。清山市民のみたさんが、日本が
 けではなく、世界軍の平和を心より願って
 ることがよくわかりました。
 広島に着いて、最初に被爆者の岡田さんの
 お話を聞きました。岡田さんがハオの時に、
 原爆が落ちて、お姉ちゃんも亡くなつたそう
 です。岡田さんの家族のことを思うと、ぼく
 は、とても悲しくなりました。
 平和記念資料館では、戦争で使われた物や
 当時の写真が残されています。ぼくが一番
 びっくりしたのは、原爆が落ちて破かいされ
 た広島市の街の模型を見た時です。広島市の街の
 建物の90%以上がなくなりました。さうい
 った約14万人が亡くなり、ゆつとの思いで生き残

った人も、黒い雨にふくまれていた放射線に
 あたって長い間、苦しめられました。それを
 見て、ぼくは、こんなおそろしい原爆は、何
 があってもせつないに使うてはいけません
 ったし、戦争は人の命をうばう戦いなので、
 戦争をやするのは、すごくまちがっていること
 だと思いました。
 平和記念式典に出て、いろんな国の人があ
 加しているのを見て、世界中この国でも、
 仲よくしていきなと改めて思いました。
 ぼくは、この貴重な体験をしたので、広島
 で学んだことを原爆のおそろしさ、戦争のこ
 わさを知らない人達に伝えていきたいです。
 そして、まずは世界で、たつた一つの被爆国
 の日本が原爆のおそろしさを世界中に伝え、
 世界中のみんなで、世界の平和を守っていき
 たいと思いました。

「平和大使として広島へ行って」



題「

広島に行き考えたこと

」

魚崎 小学校 六年 氏名 吉田 健吾

広島に行き、原爆の被害を聞いた。見たりして、ぼくは原爆のことを色々考えました。一番強く思いました。平和はすごく大切なものだと思います。被爆者の方のお話を聞いて、ぼくは人間同士で傷つけあったり、戦争をするのが疑問に思いました。そしてなぜ原爆を広島に落とされたのかということも疑問に思いました。また日本以外の外国でも原爆を作ったのにお金を回わして、インドでは核兵器を市民に見せびらかしたりしている一方、裏ではグミをおさめている子供がいたり、路上で寝ている人などがいたりとおもってしまいました。またパキスタンでは、砂漠の中にトンネルやいまにもこわれそうなアレハブ小屋ほどこで暮らしている人がいるというところもあっていました。そして日本とは逆に核兵器は良いなどの指導を受けていることを知り、ぼくはとてつもないくらいしました。また、ほかにも核兵器を持つ、という国でもこのような状況と

いうのを知りました。なぜこういうことが起きるのでしょうか。なぜなら、市民たちはまちがった情報を教えられるからです。そして、核兵器のことは一部の有力な権力者が動かしているからです。また被爆者の方は、もう戦争を経験してはならないとおっしゃっています。それを聞いて、ぼくもそのことを伝えたいかなければならないと思いました。平和でありつづけるために、ぼくたちがこの大事な体験を周りの人に発信したいです。日本で起った戦争は遠い昔のことだけれども、世界に広島の原爆のことを伝えなければならぬと思います。大人になっても次の世代に伝えていきたいです。

「平和大使として広島へ行って」

題「広島で学んだ平和」



流山市立東小学校 6年 氏名井上紗奈

私は、八月五日、六日に平和大使として、広島へ行った。六十八年前の八月六日に、こんなことがおきているなんて私はしりなかつた。一日目、被ばく者の方の体験談、広島平和記念公園に行つた。被ばく者の方の体験談では、この話が現実でおきたなんて信じられな。いお話ばかりでした。一番心に残っている言葉。い、てきます。と家を出た姉が、いまだに帰ってこない。

この一言で私は、アメリカが原子ばくだんを、広島におとしたことがゆるせなくなりました。なんで日本に、なんで広島に、そんなことばかりを、考えていました。

次に平和記念公園に行き、平和記念資料館に行きました。そこには、被ばくされた方たちの、衣類、学生証、なかには、水とフ、弁当箱、三輪車もありました。すべて本物のものが、わからないくらいに、こびていました。

これが現実、これが六十八年前の、広島にある。

たもの。そう思いたくなが、た。そんな気持ち、みっていました。

二日目は、平和記念式典に参列した。原ばくドーム、袋町小学校平和資料館に行きました。平和記念式典では、たくさんの方が参列をしていました。その中には、小中高生からお年寄りまで、はば広い年れいの方たちが参列をしていました。この広島でおきた、出き、ことを、はば広い年れいの方たちが知、て、いるほど、ものすごく大きなことだ、たのが、わかりました。

次に、原ばくドームに行きました。原ばくドームを見ると、原子ばくだんのひどさがよくわかりました。原ばくドームのまわりには、岩がごろごろとおちていました。

次は、袋町小学校平和資料館に行きました。平和資料館では、われたガラスのはへんがさ、さ、たままのかバヤ、そこがぬけたたいこもありました。

私は今回、広島に行つて、平和の大切さを学

「平和大使として広島へ行って」

題「戦争のおそしめ」



流山北小学校 6年 氏名海士 珠

以前、自由研究で「戦争」をテーマにした
 ぼくは、原爆について知っていたり、ホリでし
 た。けれども、広島に行って、それはほんの一
 部だけだと思ひ知りました。

被爆者の岡田さんの体験は、ぼくの想像を
 はるかに超えたものでした。それは六十八年
 前の八月六日の朝、空襲警報が解除され、お
 母さんと朝食を取っていた時だ、天そうです。
 きれいな日本の飛行機だと思ひ、庭に出た弟
 達、次の瞬間突然まがしすぎる光が通りを空
 み込んで、爆風ととちに四千度以上の熱が襲
 てきたやうです。原爆投下後は、放射線が充
 満しているのかわからず、被曝して亡くなっ
 ました。大人も大勢いたそうです。せいかく避難
 しても、やけどをしたため、水をちぎうだ
 いしと言ひながら、さくなくなりました。大人もい
 たと話してました。

明日も、当たり前に来ると思ひ、朝朝食の
 時間を、それをた。た一瞬の原爆が一瞬にして
 それを奪ったのです。

岡田さんは何度も、
 「もう、あなた達にはこんな体験をさせたく
 ない」と言っていました。

資料館では、原爆の被害を受けた人達の遺
 品などが、沢山ありました。実際にそれらを見
 て、「一瞬で時が止まったよな感じ」がしま
 した。時計は、八時十五分で止まって、いたし
 服も当時のままだ、大からです。

原爆ドームは、それまで「旧広島産業奨励館
 として、広島の特産物などの展示や、おし物
 が行われていました。それが一瞬にしてほと
 んど吹き飛ばされてしまいました。改めて
 原爆のい力を感ひしました。

平和大使を終えて強く思ひました。これは、一戦
 争という悲劇は二度と起こしてはならない
 ということです。今、はるかにできること、それ
 この体験を伝える事と、み人なで戦争につ
 いて、まもるとも、と学ぶことではないかと思ひま
 した。

「平和大使として広島へ行って」



題 広島原爆
 北木 小学校 5年 氏名 税本 佑太郎

ぼくが、広島に生まれた理由は、広島に原
 爆が落ちて、とんだふうになったか、知り
 たくて生まれた。あともう一つの理由は、その理由
 は、他の国がどうして原子爆弾を作ったか
 らのかが気になりました。でもぼくは、広島
 に行ってみてわかりました。なぜ他の国が原
 子爆弾を作ったか、その理由はたぶん
 自分達の国を守ろうとしていたのは、おれ
 と同じでした。あともうひとつは、広島に行つて
 みてわかったことは、戦争はまたの殺し合
 いだと思ひました。たぶん、この大事を命を
 かけたにしている人達、そのことをまじく戦争
 をしている人達は知っています。そして、ぼ
 くは日本がえらいと思ひました。なぜかとい
 うと、日本は大事なことを、この命と、た
 にしていることか、あつて戦争をやめたか
 らです。
 ぼくは、早く他の国に原子爆弾を作った
 戦争をやめるのはやめたほうがいいと、いつか

を感づいてほしいと思ひます。
 あと、ぼくは岡田さんの話をきいて、ぼくは
 感動しました。感動した理由は、岡田さ
 さんたちが、そのころの時、はみんをま
 じめに、さとうはきちょう品だつたさうか
 ず。
 ぼくは、その岡田さんたちと子どもたちが
 かんじたか、うしろしてものすこく感動
 しました。でも今のぼくは、ぼんやりして
 いたけれど、昔の人たちは、せんそう
 でおなかやすりでも日本の国を守つてい
 ました。

「平和大使として広島へ行って」



題「まだ任務は終わっていない」

流山市立小山小学校 五年 氏名大江華暖

信じられない。六十八年前の八月六日に、
 たった一つの爆弾が上空で落とされ十秒間で
 即死、生き残った者も後障害のガンや白血病
 で苦しめられていた。
 「生きてよかたと思うことは一度もな
 かった」と思う人がいると知った時、すごく
 つらく感じた。
 被爆者は差別される。なぜだろう。同じ人
 間なのに。仲間なのに。
 原爆は「悪魔」と私は思った。体にも心
 にも深いきずあとを残していく。「悪魔」と
 被爆者の岡田さんの話を聞いた時に感じた
 原爆の恐ろしさを忘れられない。
 自分の体験談を岡田さんは、子供はお寺に
 預けられていた。親が面談に来てくれるのが
 楽しみだった。八月六日にアメリカ軍の飛行
 機が飛んできたが空しく受けい報は鳴らなか
 った。
 と、話ししてくれた。鳴らなかつた。なんと初め

て知った。なぜだろう？
 資料館では原爆のこわさをうたえてくる
 ような物が展示してあった。皮ふがとけては
 がれかけてぶらさがっている人。黒こげにな
 ったおべんとう。ぼろぼろになつた服。きの
 こ雲の写真。どれも見ていただけでむねが
 苦しくなってくる。
 平和とは何だろう。平和であり続けるには
 必要なことは何だろう。
 私が考える平和は、世界中が戦争をしな
 くなつて、人々が幸せを感じることに思
 う。
 平和でありつづけるために私は「広島で見
 たこと、聞いたこと、感じたことを忘れずに
 伝えていくことだ」と思う。
 平和大使としての任務はこれからだ。被爆
 者の方々と共に世界に原爆のこわさを伝えて
 いきたいと思う。

「平和大使として広島へ行って」



題「原爆の恐ろしさを知って」

江戸川台

小学校 6年

氏名 加藤 美穂

平成二十五年、流山市平和大使として、千羽鶴を持って、広島平和祈念式に参加することになりました。

今から六十八年前の八月六日の朝八時十五分、広島に世界で初めてアメリカ軍の飛行機によつて「リトル・ボーイ」と名付けられた原子爆弾が島外病院の上空五百メートルで大爆発しました。一瞬間にして大きな「きのこ雲」ができて、火柱が登り広島の町は、焼け野原となりました。そのおかげで、

は、放射線・熱線・ばく風などがでて、大きな被害を受けました。建物は原爆くもみのように骨組を残すだけにこわれ入々は死に、あるいは生きていても、皮心は大やけどでただれ、むけてぶらさがっている。「あついで」と言つて川へ飛びかきあ入り、力つきて死んで流されていく人など、外国人を心くめ約三十五万人の人が亡くなり、とてもひどい様子でした。被ばく者の語りやの人が話してくれました。

「広島平和記念資料館」では、当時発見されたままの「焼けこげた服」や「黒こげになつた弁当」、「八時十五分で止まつた時計」などがありました。私が一番びっくりしたのは「黒い雨」です。理由は、核分裂によつてできた熱風がやけた煙やゴミを巻き上げ、まわつて降つて雨になりました。思つてもいなかつたので、びっくりしました。

次に、平和とはなにかを考へてみました。平和とは、安心して生活できること

平和とは、みんなが幸せを感じることに。その平和を「原爆くもみ」がうけつたのです。うけつた物は、一人一人みんな心で一生に、もともにもとせば、みんな喜び、幸せな生活が出来ると思ひます。これが一番の平和だと、私は思ひました。

私達が一人一人、世界を平和にするにはどのようなことをすればよいか、それを考えることが、一番大切なことだと思ひました。

「平和大使として広島へ行って」



題「 昔と今の広島 」

江戸川台 小学校 7年 氏名 佐藤 秀哉

ぼくは、平和大使になって、広島に行きました。そして、ホテルの会議室でひく者の岡田さんの話を聞きました。岡田さんの話をしてくださいました。とても信じられないようなことばかりでした。いっしょに広島市の町がまっ黒になっ、てしまっ、た。たくさんの方々が死なされた。深い穴をほり、うめたということ、ぼくはまだ人が死ぬところを見たことがありません。しかし、とてもかなしいのだからと思います。だからみんなおそろしくかたまるのだと思います。そして家族や知人に別れを告げるのです。しかし、数えることができないほどの死者がでて、まとめてうめてしまっ、た人々も、その人の家族も死んでしまっ、た人々も、とてもかなしかっ、たと思います。しました。

ぼくは、広島に行く前から、戦争はしてはいけなっ、いこと、ということば知っ、ていました。でも、広島に行っ、て本当に戦争によっ、てなにか

おこっ、たかを見たり聞いたりして、戦争というものは絶対にしてはいけなっ、いことだと思っ、ました。その日までがっ、んばっ、て生きていた人々がいっ、し、やんで死んでしまっ、うなんてひびいと思っ、ました。死んでいっ、た人々はいろいろな思っ、いをもっ、て死んでいっ、たんだと思っ、ます。また自分が生き残っ、ても家族や知り合っ、いの人がたっ、くさん死んでしまっ、たらとてもかなしいと思っ、ます。

ぼくは、広島に行く前、千羽づるを作りまし、た。ぼくは作っ、ている時、「めんどうだな」と少っ、し思っ、ていました。でも、もし今だっ、たり本當に平和を願っ、いながら作れると思っ、ます。ぼくはこの平和大使としての経験を忘れることなっ、く大人になり、またこの思っ、いを次の世代の人々へ伝えたいと思っ、ます。

「平和大使として広島へ行って」

題「平和な世界を作るために」



江戸川台小学校 5年 氏名 嶋田 あみ

私達「平和大使」は、八月五日・六日で広島へ行き、貴重な体験をしてきました。はじめに、被爆された岡田さんのお話を聞き、話を聞いて私が感じた事は、「戦争の怖さ」です。岡田さんは、「戦争は絶対にやめてはいけません。あなた達には絶対に私達のような経験をしてほしくありません」と、おっしゃっていました。そして、原爆が投下された年に七なくなりました。約十七万人だと教えてくれました。流山市の人口も約十七万人なので、流山市が滅びてしまう人数が、あの原爆一発を理由に、命を落としてしまっただかと思つたと、とても怖くなりました。

だから、戦争は絶対にやめてはいけません。だから、あらためて感じました。次に、平和記念資料館に行つて、色々な展示物や資料を見ました。その中には、犠牲者の方々の焼けこげた服や、髪の毛や、皮ふなど、思わぬ目を見せつけられるものがたくさんあります。

付近にあつた三人の被爆者の人形でした。それは、服はホロボロ、皮ふはただれて、原爆の恐ろしさを肌で感じるものでした。私は考えてみました。平和とは何だろうか。私と、そのように考えられる事自体が、平和で幸せな事なんだろうと思ひます。しかし、今でも「平和」という事を知らない人が世界に何十万人、何百万人もいるのだと思つくと、とても悲しくなります。

だから、広島や長崎で起きたあの悲惨さを知つて、いる日本が、世界に「平和」ということのすばらしさを伝えていき、何年・何十年先には、世界から「戦争」「核兵器」という物が無くなるようにしていきたいです。

そして、岡田さんから聞いた折り鶴に込められた思いを、私たちが平和大使が身近な人達に伝えていくことが大切だと思ひます。それが平和な世界を作るための第一歩だと思います。私の中で、私の中での当たり前にした事です。

「平和大使として広島へ行って」



題「八月六日わたしは広島にいた」

長崎 小学校 5年 氏名 菅我美月

六十八年前のあの日、わたしがあの場に
 たら牛きでいけなかつたと思う。何となくし
 ていいのかわからなかつた。今のわたしの毎
 日は、ご飯のおかわり、おやつ、ゲーム、
 テレビなどが当り前。でもそれは、当り前
 はなかつた。昔は戦争が多く、まずしは家族
 がほとんどのだ。もしあの時代にわたしの
 家族がいたと、お兄さんとお父さんが兵隊
 になつて、いれたかもしれない。わたしと妹とお
 母さんは毎日のご飯を食べていくことばかり
 考える大変な日々だ。たと思う。
 浦山市の人口は約十六万八千人ですが、それ
 を大きくこえる、約四十六万人の方が、一発
 の原子爆弾が落ちたことによつて被害を受
 けたことを知り、とてもおどろき悲しくな
 った。原爆後の広島は、まるでなにもかもなく
 ぬたみだりだ。た。人間が人間として、普
 通に生きていくことが出きなくなり、世帯だ
 った。わたしは、原爆とは、全をなくしてしま
 地「こく」のものだと思つた。

そしてそんな「世界を地獄に変えてしま
 う原子爆弾」を世界の中で今持つてこける国
 があることや、今でも戦争を起している国が
 多くあることが怖くなつた。どうしたか日本
 のように平和になるのか？とも思つた。
 今回、平和大使として参加するさう、前
 分の友達や知り合いが一人もいなく、少し不
 安だ。だけれど、会つたばかりでも、少し仲
 良くなれた。相手の立場を考え、思いやり、
 やさしくして、みんな分かちあえるように笑
 顔で話し合う。こんな小さなことが、平和が
 始まるのではなかりかと思つた。そしてこの大
 切な大切な当たり前の毎日「が、つ」と続
 ますように・・・と思つた。

「平和大使として広島へ行って」



題「原爆で家族が突然消える」

流山北

小学校 5年

氏名 渡邊 柊咲

1945年8月6日午前8時15分、原爆が落とされたのです。原爆について知っているつもりでしたが、平和大使になって広島に行くと、原爆はどれだけ強くて恐いと改めてわかりました。被爆者の講話聴講では、岡田さんが体験したことを話してくれました。あの日の原爆では、110秒で15人が死亡して、強れつな風、4000度の熱、放射線、さ火々におびせかけた。その瞬間、男も女も、大人も子供も、先生も生徒も、区別なく殺されました。そして4千メートル以内には放射線がばらまかれた。岡田さんの家族も同じ様に突然消えてしまっただけです。岡田さんの物は当時12才で、建物疎開に行っている時に原爆に落ち、お母さんがさがしに行っても見つからなかった。お母さんは、爆風で体中にガラスがささった。兄は軍隊にいて、死んでしまった。

岡田さんは小さいころに家族をなくしてしまっただけで、もしそれがぼくだったら、悲しすぎてなにもできなれないと思う。原爆ドームは、もともと「産業奨励館」という場所だったけど、今は平和のシンボルとして、原爆ドームと呼ばれる。これからまず、平和のシンボルを認めてほしい。そして、核兵器のない平和な世界にして、原爆などの被害がなくなっほしいと思っただ。



 写真集

7月22日(月)

平和大使 事前説明会

みんな、真剣に説明を聞きました。

ビデオ「夏服の少女たち」も見ま

した。



鶴に糸を通して千羽鶴作りに挑戦

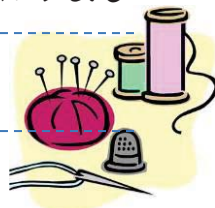
しました！

たくさん出来ました。

私たちの家族も、ボランティアの方

たちに交じって千羽鶴を作りました。

た。





7月31日(水)

結団式

「皆さんは流山市民を代表して広島
へ行くんですよ」という市長の言葉。
改めて平和大使の使命というものを
感じました。



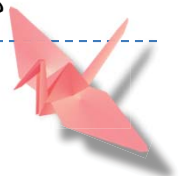
平和への願いがこもった千羽鶴を手に、広島へ行ってきます！

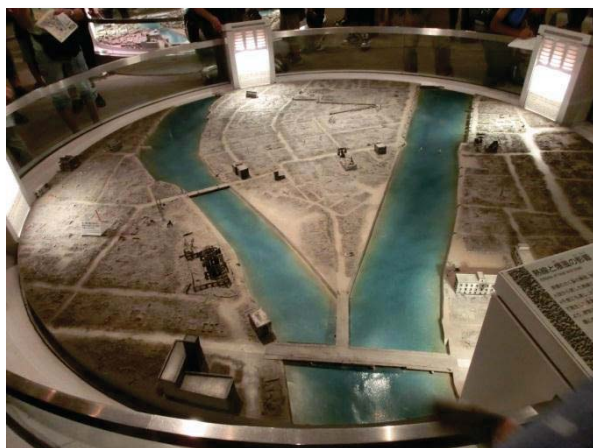


8月5日(月)

広島平和記念公園へ行き、

千羽鶴を献納しました。





被爆者の方の講話を聴いた後、平和記念資料館の見学をしました。

晩御飯は、もちろんお好み焼き。とてもおいしかったです！



8月6日(火)

平和記念式典に参加しました。

平和の鐘を鳴らし、「世界が平和に
なりますように」と願いました。



流山市の平和に関する取り組み

平和都市宣言

私たちは、平和と繁栄を市民憲章にうたい、「豊かで活力ある文化都市」流山の実現をめざしている。

私たちの国は、世界でただひとつの被爆国として、広島・長崎のいたましさと被爆者の苦しみをすべての人びとに訴え、人類共通の願いである恒久平和を達成させなければならない。

私たちは、日本国憲法の平和精神にのっとり、武力による紛争をなくし非核三原則をまもり、すべての核兵器をすてることを訴え、世界平和確立のため、ここに平和都市を宣言する。

昭和62年1月1日 流山市

平和の像



流山市は、昭和62年1月1日、市制施行20周年を迎え、これを契機に平和都市を宣言しました。

そのおり、朝倉家御遺族の御理解のもとに東京都台東区から朝倉文夫作「姉妹」像の寄贈を受け、これを、「平和の像」として市役所庁舎前のプラザの一画に建立しました。

本作品は、朝倉翁が昭和22年、戦いが終わり平和の喜びを心に秘めて制作したものとされており、本市が願う世界恒久平和のシンボルとして、永く後世に伝えるものです。

平和施策事業

流山市では、以下の平和施策に関する事業を毎年展開しています。

- 平和大使広島派遣事業
- 平和ポスター展
- 平和祈念の千羽鶴の作成
- ユニセフ平和教室



流 山 市

平成25年度流山市平和施策事業
作文集「平和大使として広島へ行って」

発 行：平成25年8月
発 行 者：流山市
編 集：流山市総合政策部企画政策課